

## かけはし～絵本から考えよう～第56号

『もうじきたべられるぼく』という絵本が2022年8月に出版されました。登場するのはもうじきたべられるウシです。最後にひと目だけ母ウシをみようと、電車に乗って生まれ育った牧場に向かう物語で、食育や親子の絆がさりげなくちりばめられています。この絵本は3年ほど前に絵本を無料で紹介するアプリに提供したところ、絵本の読み聞かせが動画投稿アプリTikTokで300万回再生され「たくさんの命をもらっている以上、大事に生きなきゃ」などのコメントが寄せられ話題になりました。2023年9月に『第7回未来屋ほん大賞』を受賞、2024年10月には累計発行部数25万部、SNSでは号泣必死と話題になっているそうです。

話題作の作者で現在65歳のはせがわゆうじさんが、この絵本の着想を得たのは20代の頃、街中で車を運転している時に牛を運搬するトラックが前を走っていて、しばらく並走すると荷台の柵から牛の鼻先が見えたそうです。交差点で遠ざかって行った後「今から屠場に行くのかなと思うと何とも言えない気持ちになった」からだそうです。日常の何気ない出来事にも思いますが、動物園で愛される動物と食べるために育てられた動物、同じ動物なのになぜこうも運命は違うのか。そのような理不尽な思いが、この何気ない出来事をはせがわさんの心に何十年と留めた理由の1つだそうです。絵本の中にも「動物園のぞうやきりんみたいにみんなに愛されてみたかったな」「おなじ動物なのに だれにも知られずに やたらと太ってたべられるのか・・・」といったセリフなどにはせがわさんの思いが込められています。



もう一つ5歳児のエピソードを紹介します。ある園でカマキリとバッタを同じ飼育ケースに入っていました。数日間は何もなかったのですが、ある日、カマキリがバッタを食べているのを子どもたちが見つめました。「バッタかわいそう」「カマキリもエサを食べないと死んでしまう」「バッタはカマキリのエサじゃないから飼育ケースにいれないで」とバッタ派とカマキリ派に分かれて言い合いが始まったそうです。こんなとき、先生方はどのように対応されますか。この時対応された先生は子どもたちとの話し合いの末、バッタとカマキリを園庭の離れた場所に逃がしたそうです。しかし、言い合っているときに見守ることしかできず、いのちの大切さについて子どもたちが考えられる場面であったが、どのように関わればよかったのだろうと、その後も悩まれたそうです。当然のことですが、バッタにもいのちがありカマキリにもいのちがあります。食べることでいのちをつなぐのですが、そこには言葉だけでは表現しきれない葛藤がありますね。

最後に、はせがわさんのコメントを紹介します。ラストの描写は夕空を背に「帰路」におかうウシの後ろ姿で締めくくられており、切なく衝撃的な物語には賛否両論あるそうです。はせがわさん自身も「自分でも答えが出ていない問題でうまく消化できていない」そうです。その上で「私たちは命を自分の中に取り込むから、その分、命を大事に考えてもらうように結びつけたかった。良い悪いというより問題意識を持ってくれたり、話し合ってくれたりするきっかけになるとうれしい」と語っておられます。